

火星



平成15年9月号

四大抄

山尾玉藻

梅雨空を裏がへりたる雨虎

その下に蚊遣置きある多羅樹かな

白毫寺道べり匂ふ草蚊遣

七夕の鶏の立てたる夕ぼこり

井戸蓋の上に手花火の用意あり

盆過ぎの鰻の釜うへを揚げし音

石棺とポンポンダリア濡れてゐる

地藏会の明りの中の水馬

虫売りと向き合うて子のしづかなり

水際に出でし蝗の貌なりし

火星作品 山尾玉藻選

適塾へひと足ごとの暑さかな 八幡 大山文子

木の橋の揺れに母在す花菖蒲

潮騒の瓜の花まで母の畑

草矢放てば木津川の大曲り

大皿を抱へ笠置の夏館

蛍を見て来し下駄の濡れぬたり 神戸 深澤 鱧

箱釣の水の匂ひに近づきぬ

箱庭のひとより大きとりけもの

はんざきの顎の水泡離れざり

七夕や蓼寄り合ふ出雲崎

六月や煎じ薬に木の匂ひ 八幡 吉田島 江

使ふカード使はぬカード百日紅

落し鱧水上バスの燦と過ぐ

葭戸入れ誰か来さうな日なりけり
南蛮の花やダンブカーよく通る
病む人の大ききてのひら緑さす
四間取りの襖はづさる梅雨の月
白日傘看取りの椅子にもたせあり
粧うて額の涼しき祭馬
大通公園ますぐに灼けゐたり
竹脱ぎし皮束ねあり羅漢寺
青葉木菟兄ひとりでは頼りなき
倒されて見えし齒科医の金魚玉
人の顔映りし中の熱帯魚
石佛に襟あしありぬ苔の花
で虫の擱みて反りし葉裏かな
箸洗うて山の蛭を見失ふ
草を茹る肋のうごく堤かな
老鶯に瘦身山を越えにけり
石白の音ある蛭袋かな

大和郡山

城

孝子

西宮 米澤 光子

吹田 伊藤 多恵子

選のあとに

山尾 玉藻

適塾へひと足ごとの暑さかな 大山 文子

「適塾」は大阪北浜にある緒方洪庵の塾、緒方塾とも言う。この句の「適塾」を緒方塾に置き換えた場合、句として成立しない。固有名詞が成功する場合は語意や音感との関係によるが、それを厳密に解明することは難しい。結局は詩人の持つ感性が成功させるのである。

はんざぎの顎の水泡離れざり 深澤 鱈

近頃のこの作家の作品には突っ込んだ所での客観写生がよく見うけられる。水中動物と「水泡」との関係だけでは特に珍しくないが、「水泡離れざり」は深く見詰めている。「はんざぎ」ならではであり、「はんざぎ」の本意を象徴していると言える。

葭戸入れ誰か来さうな日なりけり 吉田 島江

部屋の模様替えをすることで、其処に住む人の心が少しばかり変わるものである。この句の場合、「葭戸」によって

外部からの光が弱まり、作者はゆったりと落ち着いた気分になつたのであろう。「誰か来さうな日なりけり」にそんな作者の心の動きが伝わってくる。

父の日のたとへば夏炉のごときかな 戸栗 末廣

巧みな表現を駆使した句である。しかし「夏炉冬扇」と言う無用の意を利用した句であり、やや理が見えないことも無い。かと言って「夏炉」を「冬扇」に置き換えればやはりこの句も成立しない。炉と言う父親らしいものが成功させているのである。

大き蛾と半時コインランドリー 大東由美子

「半時」は一時間、「コインランドリー」に一時間もいたかどうかは別にして、あのような処での時間は長く感じられるものである。普段は嫌っている「蛾」であっても、時間潰しにその行動を逐一見るには丁度良い。「大き蛾」の大きも作者との距離感が近くなつていて良い。

箱庭に日の射して来し疲れかな 加古みちよ

「日の射して来し」の表現に直射日光ではなく木洩れる日のような柔らかさが感じられ、縁先にでも置いてある「箱庭」を想像する。「箱庭」には箱庭だけの世界があり、作者はそ

の箱庭の世界に在るのだ。「疲れかな」は陽射しに気だるさを感じたのである。

町なかの植田に三日経ちにけり 堀 義志郎

句意や風景は平凡であるが、なにか見過ごしには出来ないものがある。町そのものには「三日」経っても変化は見られないが、「植田」は確実に三日分変化してきているのである。何故かこう言う句は女性には少なく、男性らしい捉え方の作品と言えよう。

焼き栗をひとつ貫ひしばつかりに 元田 千重

散文的表現の句であるが、読み終ってみると一句に呼吸のようなものがある。「ばつかりに」のにに詠嘆があり、ここで切れている。この「焼き栗」は天津甘栗のようなものではなく、実際に眼の前で焼いてくれた栗だろう。作者の困った様子に俳諧味がある。

夕立の過ぎし八ツ手の葉なりけり 廣畑 忠明

「八ツ手」は町中でもよく見かける木、葉が大きく色が濃いだけに薄埃をのせた様子もよく目立つ。その葉が「夕立」に洗われ、鮮やかな緑を取り戻したのだ。「夕立」の前後を確実に捉える作者の眼によって、「夕立」の本意を捉えている。

明易を言うて毬藻の水替へり 丸山 照子

「明易を言うて」とあるが、家人に対してではなく独り言かまたは心の咳きと捉える方が良い。行為は「毬藻の水替へり」だけであるが、繊細で微妙な雰囲気を持つ句である。品の良い句とも言える。

梅雨空の片隅にをり観覧車 藤田 素子

梅雨明けのはづれに見ゆる能舞台 元濱 靖子

「梅雨空」の句は「片隅にをり」の表現がよく効いている。「観覧車」と言う巨大な物との間合いが良い。「梅雨明け」の句もやはり「はづれ」の措辞が良い。大阪城で薪能を観たことがあるが、その時の情景を的確に捉えてくれているように思えた。両句とも写生の切取り方で成功している。(以下略)

差知子俳句鑑賞

眼底めを焼かれ頻りに欲しき菊枕 差知子 差知子

〔岡本差知子句集〕より 昭和五十七年作

この句を書かれた頃、先生は神戸ポートピアランドの病院に月余入院されたらしい。眼底に病変があつての処置ではかなり御不自由なことであったと想像する。幸い軽い経過で済んだとはいえお気の毒なことであつた。けれど先生は初めての体験を見つめて佳句を作られた。

(千枝子)

玉藻俳句鑑賞

豆腐屋に水を貰うて地藏盆 玉藻

〔火星〕平成十四年十月号より

お地藏さんを祀る盆会。世話人が提灯を吊り、祭壇に供物供花など用意万端整えて打水をするが、何しろ八月二十四日残暑きびしい時、すぐ西日に乾いて了う。折しも商い終つた豆腐屋に会い、自転車に積んだ箱から不要となつた水をこれ幸いと頂戴する。市井の一齣をも見逃さぬ目。

(春月)

恒星巻

伊藤多恵子

てんとう虫だまし翅を濡らしてしまひけり
機部屋にベッド置かるる明易し
木くらげや梯子を持つて來たりけり
山霧に消えては現るるきすげの黄
時どきは耳鳴りてぬし明易し

大山文子

円座より杉戸の虎を斜交ひに
離れより父の急かする花瓢
砂利船の波に広がる夜店の灯
風鈴に天王山の黒くあり
三伏の鉛筆にある木の年輪

奥田節子

黒帯の丸花蜂の歩みなり
木柵のまはりが静か苔の花
花苔に水筒の水こぼれけり
丹波越えしてきし雨か杜若
掛香を吊つてやさしくなれるかな

加古みちよ

螢火の灯りて闇の深さかな
錆びてなほ梶子の香の潔し
神域に入りて黒南風身近かにす
新しき木橋組みあり花菖蒲
片影にことば探してをりにけり

瓜の花子が潦踏みゆける
鬼瓦ぞんぶんに濡るたかしの忌
栗の花三文役者の素顔なる
二上山ふたがみに考へる蟻走る蟻
荒梅雨や茫とけぶれる天王山

獅子座

山尾玉藻推薦

波田美智子

戸栗末廣

吉田康子

ほうたるに夜のまなこを洗ひけり
夕焼にひと際濃かり定年後
一匹の蚊と乗り合はず山手線
緑蔭をはみ出す笑ひ羅漢かな

中上照代

しばらくは生きられるかも心太
花守の舟緩やかに菖蒲園
梅雨見舞追伸にある「転ぶなよ」
知らぬ子のさよならといふ青葉梅雨

堀義志郎

時鳥雨にえぐれし山路なり
馬鈴薯の花を残して身罷りぬ
一丈の蜘蛛の巣なりし磨崖仏
肥後守泰山木の花の下

名を知らぬ草と伸びをり姫女苑
娘と行くスポーツクラブ花南瓜
手を振つて見送られをり雲の峰
配られし団扇鉄腕アトムなり

酔漿の垣根にボール沈みけり
はま昼顔仰山咲いて通り雨
花栗の横町の屋根にこぼれをり
電灯の紐ゆれてゐる暑さかな

城尾たか子

握る手に母のぬくもり額の花
生きるまとは微笑むことか桐の花
母の日の赤子のやうな母の顔
川音の大きくなり来糸蜻蛉

堀博子

大屋根に日向の苔の涼しかり
六甲は雲の高みに青葉潮
くちなはのつは水に飛びし音
花栗のあたり明るし志久古道